
ガラスの靴を

青リンゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラスの靴を

【Nコード】

N0464L

【作者名】

青リンゴ

【あらすじ】

可愛い女になれないなら、強い女になればいい。背が高いことを気にする風は、一番大切な人に自分の気持ちをもうずっと言わないでいる。強がりも嘘も必要ない私になればなら。

一話

例えばあの子と同じ様に

可愛い服を着て小さな靴を履いて

背の高い恋人と手をつないで

そんな私だったなら、強がりも嘘も捨てて、

誰かの肩に寄り添うこともできたのかな、と思う。

三限の授業前は教室がざわめく。

大学生にはなじまない私の空気。ミネラルウォーターを一口、口に含む。

「ね、須藤さんてモデルとかしてるの？」

くりくりとした黒目がちの瞳が見上げてくる。何度も見たことのある光景。

「…や、背—高いだけだから」

ややぶつきらぼくに答えると、彼女はその小動物のような目を揺ら

がせた。

どうやら私は優しい声の出し方も、穏やかな笑顔も忘れてしまったらしい。

二言三言話をつないだあと、なんとなく出来あがっていた女子の群れに彼女は溶け込んでいった。

……モデル、か。

いつそそんな華やかな自分だったら良かったのだけれど。

だからといって、ただの背の高い女で終われる程、私は強くない。

負けたくない。誰にも。

背筋を伸ばさなきゃいけない。可愛い女になれないなら、強い女になればいい。

いつからだろう、ヒールの高い靴ばかり集めるようになってしまったのは。

ハイヒールの数は、私の嘘の数。

二話

基本的に講義は四限まで。そのあとは本屋でバイトをしている。今日もその流れで帰りは夜になり、最寄駅の改札を出たところで後ろから声をかけられた。

「おい、そのデカイ女」

この声は……

反射的に振り返ると、

「……リョータ」

佐伯リョータとは幼馴染ってやつで、小学校・中学校と一緒に通った仲だ。

高校卒業後、リョータは服飾系の専門学校へと進んだ。昔からあたしよりでは良かったけど、こいつは好きなことじゃないと目がキラキラしないんだから仕方ないと思った。

入学したての頃一度会ったつきり、一か月近く私たちは会っていなかった。生活が忙しかったからだ。

「どう大学は？」

「……別に。そっちはどうなの専門って」

「んー、なんていうの、」

なんとなく歩き出すと、コンビニの横でリョータが足を止めた。

「……………あ。コンビニ行きたい。待ってて」

外で待っているとしばらくして、小さな箱を持って出てきた。
なにそれ、と思うと、

「足。すりむいてるよ」

「……………え、」

やっぱりこいつには敵いそうもない。
一昨日買ったばかりのハイヒールのせいで、かかとが悲鳴を上げること。誰にも言いたくなかった。

「みせて」

コンクリートの段差に腰掛けて、絆創膏の箱を見せる。あたしは大げさに嫌がった顔で隣に座った。

バカみたいに丁寧に絆創膏を貼る手。静かな瞬間。

こいつはあたしより一センチだか二センチ背が低いことを気にしているけど、そんなこと気にしなくてもいいのに。リョータの真剣な瞳を見る度そう思ってしまう。

「専門ってさあ、皆自分の世界を持つてんの」

「……………うん、」

リョータがぼつりとこぼした。

「俺の世界ってどんなもんなんだろう、ってさ、思うよ毎日。」

「…だけどさ、どんな世界でも、大切にしたいと思うんだ」

「…うん。」

こいつの言葉に心が動く私。単純なのだろうか。

明日、小動物みたいなあの子に声をかけよう。
素直にそう思った。

三話

「いちばん右端、見える？」

確かにこの教授の黒板に書く字は小さくて見にくい。

ちょうど斜め後ろからそんな声が聞こえて、軽く目をやると、どうやら同じクラスの女子達のグループらしい。

もちろん昨日話し掛けてくれた、辻さんも居る。

どの子とも、多少は話したことがあった。愛想は良くなかったと思うけど。

「……『余剰』だよ」

前から回ってきた出席カードを渡すついでに言う。

「……びっくりしたー！須藤さんが教えてくれるなんて」「ありがと、良かったー」

こんな些細な一言が、昨日までは言えなかった。

「うん、どういたしまして。」

相変わらず愛想は悪い。でも、気分は悪くない。

誰にも分からないくらいにそつと笑んだ。

「——須藤さん、何か良いことあった？」

「…えっ？」

「なんとなく。そんな気が」

さすが。

お客さんの少ないローカルなこの本屋は、人間観察が仕事みたいなところだ。

でも、日頃からかなり仏頂面である私の機嫌までお見通しなんて、本当に店長には頭が上がらない。

「須藤さんって多分、自分で思ってるより分かり易いよ」

「そうですかね？」

少し微笑った。

リョータにも前に同じ事を言われたのだ。

「……あ、そういえばこないだ、新しいバイトの子をつかまえたんだよね」

「え？また何で…」

「気に入ったから。ちなみに男の子だよ。」

そもそもこんな小さな本屋にバイトの需要があるのかさえ、正直疑問だ。

私の場合も、ある日たまたまこの店に立ち寄ったところをそのまま店長にスカウトされ、今に至る。

おおかたその彼もだろう。

「いいんですか？これ以上人件費に割ける程儲かってないんじゃない？」
「やめる現実主義は。傷付くわ」

どんな人なんだろう。

店長が気に入った人だ、ひと癖もふた癖もありそんな気もする。

早く会ってみたい。

四話

「柏木啓太です、よろしく。」

180cmを超える長身に、綺麗に筋肉のついた体。いかにも健康的な浅黒い肌が、覗く白い歯を引き立てている。

「須藤凧です。」

新しい人が入ると聞いてから数日。やっと彼に会うことができた。ちよつと、本屋の店員って感じではない。

「凄い偶然なんだけど、柏木君は須藤さんと同じ大学なんだって！」
「そう、C大つてこの辺じゃそうごろ居るわけじゃないから、俺もびつくりしましたよ。」

これには確かに驚きだ。

ここから大学までは二時間近くかかるし、当然電車ではいくつか他の大学の最寄駅を見送る事になる。

この辺りに住んでいる人間なら条件で言えばあまり選ばない大学かもしれない。

「須藤さんは学部どこなのか？」

「あ、経済です。柏木さんは？」

「さすがに学部までは違った。俺は法、二年です。」

法学部棟は経済学部棟の隣だ。

知らないうちにすれ違っていたこともあるかもしれない。

ところで、店長が妙な含み笑いをしている。さつきから気になっていたが、触れないでおく。

おじさんになってもこの人の心はいつまでもいたずらっ子のそれだ。

突然、柏木さんがずい、と近付いて私の視界を占めた。

「――？…須藤さん、目、」

夕方の西日が私の瞳を透かしている。

瞳が研ぎ澄まされるのを身体で感じていた。

顔を覗き込まれるのは大嫌いだ、いかんせん、私の心は慣れてしまつて冷え冷えしている。こんな感覚はとても淋しい。

混血の瞳は一生私の世界を映していく。きっと私はいくらでもずるくなれるだろう。

黒い瞳にだつて望むならばいつだってなれるのだ。

だけど私はそれをしない。

「きれいだ凄く。」

ごく自然に彼はそう言った。まるで呼吸のように。気障だ。どうしようもなく。

ただ彼の言葉には何の含みもなくそれはとても透明だった。泣けてしまつくらい素直だった。

私は崖から落ちるみたいに、あるいはキューッと音が聞こえるくらいに惹かれた。彼という人間に。

「ね、今度大学で学食でも行こうよ。ちなみに長崎ちゃんぽんが俺のヘビロテ。」

少年のような瞳が印象に残る。

いいですね、といつになく誘いに応じた。

久しぶりに上機嫌で帰路につく。

本屋（もちろんバイト先の、だ）で薄い本を買った。女性作家の、たぶんさらっと読めるのを。

これからコンビニへお菓子を買いに行く。

今夜は気の済むまで起きていよう。

この晴れた気持ちを忘れてしまわないように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0464/>

ガラスの靴を

2010年12月23日22時52分発行